

この伝説の傭兵に転生
を！

肌男のメンズビオレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タンカー編で死んでしまったスネークが、このすばの世界に行き、色々やって魔王を倒す話、基本的に原作にそって話を進めていきます。あとタグにも書いてありますがキャラ崩壊（しゃべり方が変、等々）が酷い可能性があります。

目次

第一章

この伝説の傭兵に転生を！ | 1

第2話 | 7

3話 | 12

4話 | 20

五話 | 27

6話 | 40

7話 | 53

第一章

この伝説の傭兵に転生を！

初の投稿です！誤字脱字等々あると思いますがよろしくお願いいたします！時系列はタンカー編の終わった所です！

確か俺は、タンカーから脱出しようとして、意識が遠のいて、
「ここはどこだ？」

俺は今黒と白のチェックの部屋にいて自分は椅子に座っている
だがここはどこだろう、オタコンのヘリの中じや無さそうだし、医療機械が無いの
を見ると、病院でも無さそうだし、
と、そして、無線が使えない

「ソリッド・スネークさんようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。短い人生でしたがあなたの生は終わったのです。」

「はあ？」

何を言い出すんだろう、この女は。

俺が死んだ?

というかこの女は何者だろうか、喋りかけてきた時に全く気配がしなかった

「私はこの世界で若くして死んだものを導く女神、アクアよ、そんなあなたには二つの選択肢があります。一つは、天国みたいな所でおじいちゃんみたいな暮らしをする事、もう一つは異世界に行ってもらって魔王を倒して貰うこと。」

「それじゃあ、天国で頼む」

「あのね、天国っていうのはあんた達人間が考えるような楽しい所じゃないの、あなたの好きな煙草もないし、そもそも体が無いから喋ったり、日向ぼっこする以外は基本何もできないわ、だから貴方みたいな人は天国なんかに行かない方がいいわよ」

「そうなのか、それなら魔王を倒す方で頼む」

「そう!それじゃあなたには何者にも負けない強い力、つまり特典をあげるわ、この中から選んでちょうだい」

「聖剣アロンダイト」

「魔剣グラム」

「魔剣ムラマサ」

「怪力」

「超魔力」

等々いろんな物があつた、だが俺は少し気になる事があつたので聞いてみた

「向こうの世界に俺が使つてたような銃はるか?」

「えつと、、あるっちゃあるけど単発式の火縄銃みたいな奴しか無いわよ」

「そうか、向こうで銃を作つたりする事は出来るか?」

「やつたこと無いからわかんないけど、多分無理よ、材料が足りないわ、でも魔法で作る事なら出来るわ」

「じゃ、それで頼む」

「わかつたわ、」

「それじゃあ魔方阵から出ないようにね」

—————

気がついたら街の入り口(?)にいた

まずあの女神に聞いた話だと冒険者ギルドに行かなくては

いけないらしい、俺は試しにしゃがんで無線をかけようとしてみた、すると、

女神 アクア 145.44

大佐やオタコンの周波数が消えていて、先程の女神の周波数が登録されている、試し

にこの無線を使ってみると、

「もしもし、女神アクアですけど、ご用件は何ですか?」

「おい、これはなんだ? オタコンや大佐の無線が消えていてなぜお前の奴がある?」

「ああ、それはね、貴方は一度世界を救った事があるのでおまけの特典として、着けさせて貰ったわ、ただ、あなたが生前使っていたナノマシンとは別物よ」

「そうか、で、冒険者ギルドはどこにあるんだ?」

「それなら今あなたがいる道を真っ直ぐ突き当たりまで進めば良いわよ。」

「そうか、助かった」

そうして俺は冒険者ギルドに向かった

「いらっしやいませ! 冒険者登録なら向こうの受付へ! お食事は空いてるお席へどうぞ
!」

俺はその受付に着くと

「冒険者登録をしたいのだが、」

「それなら登録料に千エリスかかりますがよろしいですか?」

「これでいいか?」

俺はポケットの金貨を受付嬢に渡した

「はい! 大丈夫です! ではこちらの機械に触れてください!」

「ほら、これでいいか？」

「はい、OKです、、、えっと、魔力が異常な量ありますね、あと攻撃力も半端ないですし、基本的なステータスもカンストしてますね！あなた何者ですか!？」

「とりあえずこのステータスならなんにでもなれますよ！アークウイザード、ソードマスター、アークプリースト、クルセイダー、等々、」

「どれが一番強いんだ？」

「えっと、魔法を使うならアークウイザードだし、攻撃力だけで言うならソードマスターですし、防御力に長けているのは、クルセイダー、回復やアンデットに対して強いのがアークプリーストです、」

「それじゃ、アークウイザードで頼む」

「わかりました！アークウイザードつとそれではスネーク様！ようこそ冒険者ギルドへ！スタッフ一同今後の活動を期待しています！」

そうして俺は、異世界での生活を始めるのだった

最後まで読んで頂きありがとうございました！

作者が続けられるよう努力しますのでどうかよろしくお願いいたします！

ちなみにスネークの特典はオリジナルで特典は『製造魔法』と『無線機』です！

作中ではスネークの名前は「ディビット」ではなく「スネーク」にしました。
コメント、お気に入り等してけるととても嬉しいです！

第2話

スネークが出す銃は名前を書けばいいのか、種類を書けばいいのか、もしくは両方か、

冒者登録を済ませた俺は冒険者カードを眺めていた。

表示されている全てのスキルは取った、しかし、ポイントがまだ100もある、これは大丈夫なのだろうか、

そもそも普通の冒険者はパーティーと言うものを組み、そのパーティーでクエストを受けたりするらしい、正直今までのミッションは、単独潜入だったが、この世界の常識を知らない俺にとっては一人で迂闊に行動するのは危険だ、何か教えてくれたりするパーティーメンバーが必要だった。

今のところ頼れる奴はあの女神しかない、不安だ。

取り敢えず自分がよく使っている銃が欲しかった、だがどうやって魔法を使うのかわからない、その時だった

『CALL』

あの女神からの無線が来た

「こちらスネーク、要件はなんだ？アクア」

「あのね、魔法の使い方について説明してなかったから今更だけど説明させてもらうわ、まずあなたが今欲しい武器の形と名前を想像して、そして手に魔力を込めるの、試してみて、」

「こうか？」

言われた通りに手に魔力を込めて魔方陣が現れる、

そこからM4A1を取り出す

「出来たぞ」

「そ、ならいいのだけど、実はそれには武器を作るだけの能力じゃないのよ、」

「どういうことだ？」

「もう気づいているかもしれないけどその魔法を使えば何だって作れるわ、魔力さえあればとてつもなくデカイ兵器だって作れるそして、それはあなたが望まない限り消えない」

「え？」

「だからあなたが戦ったメタルギアだって作る事が出来るわ」

「じゃあ基本的に何でも作れるという認識でいいんだな？」

「ええ、そうよ」

「わかった、わざわざ報告してくれて助かった」

「あと、あなたの魔力なら文字通り何でも作れるわ、でも生物は作ることが出来なくなってる。まあ色々試してみてね」

「了解」

何でも作れるのは嬉しい事だが、今は仲間が必要だ、何かパーテイーマンバー募集の紙が掲示板に貼ってないだろうか

そんな期待を少し持ちつつ俺は掲示板に向かった

「あ、クエストを受けるんですか？」

受付嬢がしゃべりかけてきた

「いや、仲間が必要だから見に来ただけだ」

「そうですか、でもスネークさん程の腕なら自分一人で何でも出来そうですけどね」

「いや、ちよつと色々教えて欲しくてな、」

「簡単なクエストなら少しは慣れると思いますし、このジャイアントトードなんかいかがですか？初心者が高くやるクエストですし、簡単ですよ！」

「そうか、じゃあそれを受けよう」

「はい！わかりました！」

ジャイアントトードを5体討伐しろ

まずは自分の中でイメージする

H&KPSK-12（スナイパーライフル）を魔方阵から取り出す

そして、狙い、撃つ

すると、簡単にジャイアントトード（以後カエル）

が倒れた

、だが今の銃声で新たなカエルが沸きだしたので

また狙って撃つ、慣れた手つきでどんどんカエルを倒していく、、、

気がつくのと夕方になっており辺り一面カエルの死体だらけになっていた、少し気持ち

悪くなり、ギルドに帰った

「はいーでは、カエル25体の討伐で60万エリス、死体の買取り額が20万エリスで

合計80万エリスになりますお確かめ下さい、にしても凄いですね、初日にこの討伐は」

「そうか、あと、パーティーメンバー募集の張り紙をしようと貰いたいんだが、」

「ええ、いいですよ、では、掲示板に張り紙しておきますね」

それから俺は宿に泊まった

次の日もカエルがいた平原に行きカエル狩りついでに能力の確認をした

様々な武器を出したりして能力を試した、試しに戦車を出してみたが、とてつもない

疲労感が襲い掛かって来たのですぐに消した、街に帰ってすぐに宿に入った。

何時間寝ていただろうか気がつくともう9時だった、宿をでてギルドへ向かおうすると、

『CALL』

また無線が来た、あの女神だろうか、

「こちらスネーク、どうした？アクア」

「スネーク、ちょっとお願いがあるの、冒険者ギルドまで来て」

アクアがた何時もとは違い低いトーンでしゃべりかけてくる

「え？」

意味がわからない、アクアは今天界にいるはず、なのにどうして下界のギルドに呼び出しが来るのだろうか、

「いいから来なさいよ！」

「ああ、わかったよ、すぐに行く」

最後まで読んで頂きありがとうございます！出来ればアドバイス等貰えると嬉しいです！

3話

アクアから呼び出され、俺は冒険者ギルドへ向かう。

ギルドに着くと、そこには緑色のジャージを着た少年と俺をこの世界に送り込んだ女神、アクアがいた

「おい、アクア、こんな所に居るんだ？」

「ちゃんと話すとき長くなるんだけど、簡単に言うと、このヒキニートに特典として、連れてこられたの、」

「女神は特典になるのか？」

「わからないわよ、試した事無かったし、でも無事降臨出来る所を見ると、特典になるっぽい」

「俺を呼び出した理由は？」

「お金を貸して欲しいの、冒険者登録をしたいのだけどお金が足りなくて」
「で、いくら必要なんだ？」

「2000エリスよ」

「はあ、わかった」

財布から2000エリスを取り出し、アクアに渡す、すると、今まで黙っていた緑のジャージを着た少年が口を開いた

「おいアクア、このお兄さんは誰だ？」

「この人はね、伝説の傭兵と呼ばれた英雄よ！一人で要塞を陥落させたり、デカイ兵器を一人で壊したりする人よ！」

「え、まじでか！この人、こんな凄い人だったのか！」

「そうよ」

「スネークと読んでくれ、よろしく頼む」

「あ、僕は和真と言うものです。よろしくお願い致します」

自己紹介が終わり自分は席に着き、アクア達が、登録をするのを確認する

「スネーク！登録終わったわよ！」

「で、どうだった？」

「知力以外はとて高かったわ！職業はアークプリーストよ！」

「そうか、それでちよつと頼みがあるんだが」

「ん？なに？」

「カズマにも無線機を着けて欲しいんだ」

「良いわよ、カズマの周波数は145.55よ、明日から使えるわ」

「でもその代わり私達からも頼みがあるの」

「なんだ？」

「私達のパーティーに入って欲しいの」

「ああ、わかった、ところでカズマの職業は何だった？」

「冒険者よ」

「冒険者か、」

「じゃあ明日から討伐クエストに出るからこの金で装備を買っておけ、」

「わかったわ！カズマー！装備買いに行くわよー！」

アクアが冒険者ギルド後にしたのを確認して、掲示板に貼ったパーティーメンバー募集の紙を剥がした

そして、金が欲しかったのでクエストを受けた

一撃熊の討伐

一撃熊が良くいるという森に入ろうとしたときに、熊の叫び声が聞こえた

声の方を見ると、一撃熊らしき熊がこちらに向かって猛スピードで向かって来た

まだ距離があつたので俺はすぐにRPG-7を熊に向けて撃った

RPGをまともにくらつた熊は吹き飛んでいた、取り敢えずこれでクエストを完了し

たのでギルドで報告を済ませてから宿屋に帰った

『CALL』『CALL』

アクアからのしつこい無線によって目が覚めた

「こちらスネークさんの用だ？」

「パーティーメンバーに入りたい子がいるの！早くギルドに来て！」

「ああ、すぐに行く」

ギルドに着くと、人で溢れていたこんな状況ではとてもあいつらを見つける事なんか出来ない

試運転も兼ねてカズマに無線をした

——カズマ視点——

アクアと昨日アクアがパーティーに誘ったという紅魔族のめぐみんという子の自己紹介を聞いていると、

『CALL』

「え？」

「ん?どうしたのカズマ」

「いや、なんか頭に直接電話みたいなのがかかってきて、『CALL』って出るんだけどこれ、なんふの事かわかるか?アクア」

「ああ、それなら昨日私がカズマが寝てる間に埋め込んだ無線機よ、昨日スネークから頼まれていたの、無線をとろうと頭の中で念じれば繋がるわよ」

「は?お前俺の頭になにしてくれてんだよ!副作用解かねえだろうな!」

「無いわよ」

「ならいいんだけど、頭の中で念じればいいんだな?」

『CALL』

「あ、もしもしカズマです」

「こちらスネーク、聞こえるか?」

「ええ、聞こえてますよ」

「ならいい、無線機の説明は受けたか?」

「まあ、大体は」

「そうか、ギルドに着いたけどいまどこにいるんだ?」

「えっと、その真ん中の「え?何?もう着いたの?」ならそっち行くから入り口らへんで待っててちょうだい」 てかこの無線、割り込みとかできるんですか?」

「ああ、そうだ」

「え、つてことは勝手に聞かれたりする可能性も、ありますか？」

「いや、それはない、この無線機を持っているのは今の3人だけだ」

「へえそうなんですか、」

「お、アクアが来たから一回切るぞ」

「わかりました」

——スネーク視点——

「スネーク！こつちよ！」

「わかった」

「アクアが先に行くので俺はそれについて行くすると、カズマと十歳位の女の子がいた
「おい、アクアこの世界は未成年でも冒険者登録できるのか？」

「ええ、そうよ」

不安になりつつもその女の子に喋りかける

「初めまして、お前がパーティーに入る予定なのか？」

「我が名はめぐみん！紅魔族随一のアークウィザードで、爆裂魔法を操りし者！」

『CALL』

「ちよつと待ってくれ」

「なんだ？カズマ」

「紅魔族は全員変な名前を持ってて、全員が厨二病だ、」

「そうか、じゃあこいつは俺の事をからかっているんじゃないんだな？」

「そうだ」

「わかつた、ありがとう」

「で、めぐみんといったな」

「はい、」

俺もアークウイザードだがお前はどの魔法が使えるんだ？」

「爆裂魔法です」

「え？」

「爆裂魔法です」

「えつと、すまない、爆裂魔法ってなんだ？」

「人類最強の攻撃魔法です」

「？」

「とんでもない爆発を起こし、あらゆる者を消し飛ばす魔法です」

「ほう、じゃあ見せてもらおうじゃないか」

『『CALL』』

「いきなりなんなんだ？アクア」

「あのね、爆裂魔法はとてつもない範囲に影響を及ぼすの、だから、街中で見せてみるなんて言っちゃダメよ

しかも相手が頭のおかしい爆裂娘なんだから」

「了解した」

「よし、じゃあめぐみん、クエストを受けて街の外へ出るぞ、ついでに爆裂魔法とやらも教えてくれ」

「ええ、良いでしょう！その目に我が爆裂魔法の凄さを焼き付けさせてあげます」

最後まで読んで頂きありがとうございます！

スネークのキャラ書くのちよつと難しい、、、

4話

めぐみんを連れて、カエルがいた平原に来た

「ここら辺でいいか？」

「はい、でも爆裂魔法は人類最強の攻撃手段です、そのため、準備時間がかかります。すみませんがカエルをひとまとめにしといてもらえませんか？」

「ああ、わかったカズマ、やってこい」

「ああ、わかったよ」

すると、カズマが走り回ってカエルを一ヶ所にうまい具合に集めた

「ではいきますよ！『エクスプロージョン』!!」

「ほう、中々の威力だな、是非とも覚えたい所だ」

俺がそう口走った瞬間

「『CALL』『CALL』」

145. 44 アクア

155. 55 カズマ

「あれはネタ魔法よ!?何を考えているのスネーク!?」

「そうだぞ!? あれは膨大な魔力を使うんだ、俺はめぐみんの冒険者カードを見させてもらったが軽く150はあつたぞ!」

「なんだ、ならいけるじゃないか俺にも撃てる」

「スネーク、悪い事は言わないわやめなさい、だってあの魔法はスキルポイントだってバカになら無いわよ」

「ほう、幾らなんだ?」

「50ポイントは必要よ」

「余裕じゃないか」

「へ?」

「スキルポイントならまだ100はあるぞ?」

「は?」

「んなもんチートじゃない!」

「まずい、めぐみんが食われそうだ、一回切るぞ、」

「めぐみん!」

「スネーク、早く助けてくださいませんか? 魔力切れで動けないんです、食われます、早く助け、」

「了解!」

俺はそう言い魔方阵からデザートイーグルを取り出した

カエルの頭に狙いを定め、引き金を引く、ズドンと言う音が響く

「ぷはあ！助かりました、ところで今スネークが持っている武器はなんですか？」

「後で教えてやる」

向こうの方で食べられたアクアをカズマが助けていた

あいつ、ちゃんと戦えるんだな

「ところで、近くにカエルがまた湧いたので、倒してもらえませんか？」

「もうあの魔法を撃てないのか？」

「無理ですね、正直口を動かすのも辛いです」

「そうか」

そう言いつつM4A1を取り出しカエル共に向けて乱射した、

どれだけのカエルを倒しただろうか、辺り一面はカエルの死体だらけになっていた

「スネーク、あなたの持つているその黒光りする連射できる銃はなんですか？普通の銃

とは根本的に構造が違うようですが」

「これはM4という武器だ、俺の居た国で良く使われていた、ちなみに俺は『製造魔法』

を使う事が出来る」

「聞いたことのない魔法ですが、名前からして、物を作る事ができる魔法ですか？」

「まあ、そんな感じだ、それよりめぐみん、」

「ん？なんですか？」

「頼みたい事があるんだが、、爆裂魔法を教えてくださいか？」

「ええ、良いですよ！ではー」

それからめぐみんに爆裂魔法を教えて貰い、試し撃ちをしようと言ふことになった

スネーク「黒きより黒く闇より深き漆黒に我が深紅の混交を望たもう覚醒の時来たれり、無行の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ！ 踊れ、踊れ、踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり、並ぶ物無き崩壊なり万象等しく灰塵に帰し、深淵より来たれ！『エクスプロージョン』!!!」

その瞬間俺の目の前が辺り一面焼け野原になった、

「流石はスネークですね！初めて撃つたにしては上出来じゃないですか！」

「そうか、」

『CALL』

145. 44 アクア

「スネーク、今、何をしたの？」

「爆裂魔法を撃った」

「はあ!?!あの魔法だけは取っちゃダメって言ったじゃない!」

「いや、でも」

「そもそも爆裂魔法は並の魔力量じゃ撃てない筈よ!あなた今倒れたりしてないでしょうね!」

「大丈夫だ、問題なく撃てた」

「そう、それはともかく早いこと帰って来なさいよ」

「今回は珍しくお金が入ったからカズマが奢るそうよ!」

「わかった、すぐ戻る」

「めぐみん、帰るぞ」

「わかりました、」

『『CALL』』

145. 55 カズマ

「なんだ?カズマ」

「めぐみんをパーティーに入れるかどうかなんだが、あいつはどうなんだ?」

「どう?と言われてもな、」

「使えるか?」

「どうだろうな、使い方によっちゃ使えるし、使い方によったら使えない事もある」

「使えるようにするにはどうしたらいいんだ？」

「家があれば取り敢えず使えると思うぞ」

「どうするんだ？」

「家をテレポート先に登録しておいて、めぐみんが爆裂魔法を撃つたらテレポートですぐに退却する」

「なるほど」

「しかし、誰がテレポートを使うんだ？」

「俺が使える」

「ああ、まじでか！ならめぐみんをパーティーにいれよう！ギルドで待つてるぞー！」

「さて、めぐみん」

「なんですか？」

「実は俺のパーティーメンバーは少し人体改造をしていてな、頭の中に無線機を取り付けているんだ、」

「ほお、」

「だからめぐみんにも取り付けさせて貰いたいんだが、、」

「良いですよ！改造人間って、なんか格好いいですし、」

「そうか、」

145. 44 アクア

「もしもし、聞こえるか？」

「聞こえてるわよ、で、どうしたの？」

「実はな、めぐみんにも無線機を取り付けてほしいんだが」

「別にいいけどめぐみんの許可は貰ったの？」

「ああ、大丈夫だ」

「そう、なら良いわ明日から使えるわよ、周波数は155. 45

よ」

「了解した、」

「よし、冒険者ギルドに着いたな」

その後、カズマと共に飯食べ、風呂には言った後は宿屋に帰って寝た。

五話

俺が爆裂魔法を覚えてから一週間が経った、新たな仲間として、クルセイダーのダグネスという女がパーティーに入った、俺はその時居なかったが、カズマの話によると、DMで、攻撃の当たらない美人らしい、

アクアが勝手にダグネスに無線機を取り付けて、カズマとひと悶着あったそうだが、実際に会ってみるととても美人だった、ただ、思っていたよりDMで、すぐに敵に突っ込んで行くらしい、そして自分も襲われそうになり、CCCをかけたが全く効かず、逃げたら追いかけてきた、ダグネスから逃げるために、俺は朝早くから起きて、高難易度のクエストを受ける、

俺もこの世界に慣れてきたからか、高難易度のクエストも簡単にこなせるようになってきた、しかし、最近低難易度のクエストがない、

聞くと魔王軍の幹部がアクセルの町の近くに引っ越して来たそうだが、それで弱いモンスターは巣から出てこずに引きこもっているらしい、

『CALL』

155・45 めぐみん

「どうした？めぐみん、お前から連絡してくるなんて珍しいじゃないか」

「あのですね、1日1爆裂に付き合っただけです」

「カズマやダグネス、もしくはアクアとでも行けばいいんじゃないのか？」

「まあ、そうなのですが、カズマは朝早くから出ていきましたし、ダグネスは実家に帰っていていません、アクアはバイトです、」

「そうか、ならクエストに行くついでで良いか？」

「ええ、良いですよ」

「じゃあ、ギルドで待っていますので」

めぐみんとは無線を終え、ギルドへ向かう、正直自分の爆裂魔法はめぐみんと比べると貧相な物だ、めぐみんの爆裂魔法は、地形を変えるほどの威力だが、俺の爆裂魔法は、せいぜい大きめの岩を吹き飛ばす程度の威力しかない、だから俺も練習をしたいのだ

ギルドへ着くと、めぐみんと合流する、

「では、行きましようか、」

「ああ、」

いつもめぐみんが爆裂魔法を撃ちこんでいるという、廃城の近くまでやってくる

「ここです、あの城に向けて爆裂魔法を撃ちます」

「あそこに、人は住んでないのか？」

「ええ、多分」

「ならいい」

「では、撃ちますね、『エクスペロージョン』!!」

「おお、流石だな」

「スネークを撃つて見てはどうですか？元々の才能もありますが、爆裂魔法は練習すると、威力や範囲がある程度上がりますよ」

「そうなのか？」

「というか、慣れです。膨大な魔力を使う爆裂魔法は普通の魔法と違い、魔力の制御が難しく、上手く撃てない事が多いのです」

「つまり沢山撃てば上手くなるのか？」

「才能があれば上手くなりますが、才能がなければ上達速度は遅いでしょうね」

「つまり才能が全て、と言うことか」

「いえ、才能が無くても100発程撃てばある程度は上達しますよ、」

「じゃあめぐみん、俺にも才能があるか見てくれないか？」

「良いですよ、じゃあ出来る限りの魔力を込めて撃ってください」

「了解、『エクスペロージョン』！」

「うーん、、、スネーク、これで爆裂魔法を撃つのは何回目ですか？」

「4回目だ」

「その、スネーク、残念なことにはあなたには才能があまりありません、普通の人の倍がんばらないと私並みにはなれません」

「俺は大体何発位撃てば上手くなるんだ？」

「100〜150発てますね、でも爆裂魔法の研究等をしつかりすれば70〜90発位までで上達します」

「つまり、無理と言うことか、」

「残念ながらそうです」

「そもそもスネークは魔力の制御が下手すぎです！スネークが普段使う、あの魔法だつてもっとと上手く魔力を制御すれば沢山のものを作る事ができる筈です！」

「でもなあ、魔力の制御の練習なんてどうやってやるんだ？」

「沢山魔法を使って体で覚えるか、ちゃんと指導できる人の下で指導してもらおうしかないですね」

「めぐみんが教える事は出来ないのか？」

「普通の魔法は無理ですね、爆裂魔法しか使わない私の指導を受けると、爆裂魔法は上手くなつても、ちゃんとした魔力の制御が出来るようになるかどうかはわかりません」

「そうか、」

「てか、スネークなら魔力は沢山あるんですし、魔法を撃ちまくればいいんじゃないですか？」

「上級魔法とかの事か？」

「まあ、それでもいいですが、スネーク程の初心者なら、中級魔法を連発して、経験を積んだ方が良いでしょうね」

「そうか、なら、

『ファイヤーボール』！ 『フリーズガスト』！ 『ライトニング』！ 『ウインドプレス』！

『ファイヤーボール』！ 『ファイヤーボール』！ 『ふう、こんなもんか？』

「まあ、ちよつとは良くなりましたね」

「最初のファイヤーボールと最後のファイヤーボールは威力が多少、違いましたから」

「本当か？」

「ええ、じゃあ今日は帰りましょうか」

「その前に、ちよつとだけ練習していいこう」

そして、俺は1週間以上握っていない、RPG-7を取りだし、廃城に撃ち込んだ、5発位撃ち込むと、感覚が戻ってきたから、俺達は街に帰った

街に戻った俺達はカズマ達と合流し、ギルドで飯を食べると、明日に向けて宿で寝た

『緊急！緊急！冒険者の皆さんは至急、武装して、街の正門付近に集まって下さい！』
俺は急な警報によって目が覚めた

宿から出て、正門に行くところには黒い鎧に身を包み、頭のない馬に乗った首なし騎士、デユラハンが立って居た

「、、、俺はつい最近この街の近くに越してきた魔王軍幹部のベルディアという者だが、、、」

「ま、ままま毎日毎日毎日！毎日欠かさず俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでくる頭のおかしい大馬鹿者は誰だああー！」

周囲を見渡すとめぐみんや、カズマ、アクア達がいた

「爆裂魔法？」

「爆裂魔法といたら、、、」

と、冒険者達がめぐみんの方を見る

すると、めぐみんがその横にいた魔法使いの女の子を見る

それに釣られて、カズマや、他の冒険者達もその女の子を見る

「ええ!? あ、あたし!? なんであたしが見られてんの?! 爆裂魔法なんて使えないよっ！」

そして、カズマ達が諦めたかのようにして、ベルディアの前に出た

「お前が、、、！お前が、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶちこんでくる大馬鹿者か!?俺が魔

「俺が行く必要あるか？」

「昨日、めぐみんと一緒に魔法を撃ち込んだでしょう？」

「あ、ああ、わかった、すぐに行く」

冒険者を掻き分け前に出る、するとカズマが後は頼んだ、という顔ですれ違い、冒険者達の中に戻っていく、

ベルディアはこちらを不思議そうにみて言った

「おい、誰だお前は!?!もしかしてお前も爆裂魔法を撃ち込んだきた犯人か？」

「ああ、そうだ」

「お前も何故あんなことをする!?!」

「いや、すまない、お前があんなところに住んでいるとは、思わ無かったんだ」

「まあいい、俺にも弱者を刈り取る趣味はない、しばらくはこの地に滞在すると思うが、もう魔法を撃ち込むなよ？」

「それは無理です、紅魔族は爆裂魔法を1日に一回撃たな

いと死ぬんです」

「おい、そんなこと聞いたことが無いぞ! 適当なウソヲつくな!」

「どうあっても爆裂魔法を撃ち込む気はないと? そう言うことなら俺にも考えがあるぞ」

その迫力にめぐみんも少しビクツとしているのが分かったがすぐに不敵な笑みを浮かべた

「そもそも、貴方の城に爆裂魔法を撃ち込んだのは、貴方を誘き寄せざる為の作戦なので、アンデットのあなたがここに来たのが運の尽きです！先生方、お願いします！」

と、俺とアクアを指さして言った

「しようがないわねー！魔王軍の幹部だかなんだか知らないけど、この私が居るときにくるなんて、運が悪かったわねー！しかもアンデットが力の弱まる昼間にのこのこやってくるなんて、わざわざ浄化してくださいって言うてるような物だわ！あんたのせいでもともなクエストが受けられないのよ！さあ、覚悟は良いかしら？」

『CALL』

145. 55 カズマ

145. 44 アクア

155. 44 ダグネス

「一体こんなときになんなんだ？カズマ」

「確か、デユラハンの弱点は水です、なので水系列の魔法で戦う事をお勧めします。」

「あと、アンデットは物理攻撃が効きにくいわ、だから現代の武器なら爆発系にしなさい

！」

「私はデユラハンの前に出て、囿になろう、スネーク、私に構わず遠慮無く攻撃してくれ」
「そうか、助かった」

「よし、じゃあ作戦通りに！」

「おう」

ダグネスがまえに出て、デユラハンの攻撃を受けるなか、カズマはアクアに指示を出したあと、他の魔法使いの所に行った、

そして俺はM47 ドラゴンを精製し、ベルディアに向けて撃つ、ひたすらベルディアに向けて5発ほど撃ち込むと、

後ろの方から大量の水が飛んできた、きつとカズマが周囲の魔法使いを説得したのだろう。俺も水で攻撃しようと思った瞬間

「スネークさん！避けて！」

俺が上を見ると、大量の水が降ってきた、

「ク！」

「ネーク！」

「スネーク!!」

めぐみんとアクアの声がする

「スネーク！」

目が覚めたらアクアとめぐみんが心配して声をかけてくれていた様だった
体を起こすとそこは先程戦っていた正門前だった

近くには、ベルディアの体がうなだれている、そして、カズマ達冒険者はなにやら騒
がしかつた、良く見るとベルディアの頭を使ってサッカーをしているようだった

「どのくらい気絶してたんだ？」

「約10分位ですね」

「何が起きたんだ？」

「アクアの出した水がうっかかりスネークの頭に直撃して、その衝撃で気絶したんだと
思います」

「何故カズマ達はベルディアの頭でサッカーをしているんだ？」

「水で弱ったベルディアにステイルをしたら、ベルディアの頭が手に入りまして、それ
でカズマがサッカーをしようって言ったからです」

「おい、カズマ、そろそろ浄化しろ、」

「わかりました！おい、アクア、もう浄化してやってくれー」

「はいー！じゃあ行くわよ！『セイクリッド・ブレイクスperl』!!!」

「ぎやああああああ!!」

、、、

ベルディアの討伐が終わり、俺達はギルドに来ていた、ベルディアには賞金が大量に掛けられており、三億エリスの賞金が懸かっていた

「それでは、ベルディア討伐を記念して、『乾杯!』」

賞金を受け取った後は、カズマが調子に乗っていたり、めぐみんが酒を飲もうとしていたり、アクアがゲロを吐いたり、様々なことがあった

俺は宿に帰り、一服してから、寝ようとしたら

『CALL』

145・55 カズマ

「こんな夜遅くになんだ?カズマ」

「えっと、スネークさん、」

「スネークでいい、あと、敬語はやめろ、」

「えっ?どうして?」

「正直お前がちゃんと戦えるか不安だったし、まともな奴かどうかは分からなかった」

「え、でもそれならなんでタメ口でいいんですか?」

「お前はリーダーシップがあり、このパーティを上手くまとめられているし、そこそこ知

識もある、」

「そ、そうですか、なら、スネーク、明日パーティホームを見に行こうと思うんだ」

「何故だ？」

「そろそろ冬に入るし、馬小屋だと辛いんだ」

「そうか、なら明日はクエストに行かずにギルドで待っているからな」

「おう！じゃあまた明日な、」

「ああ、」

カズマとの通信を終えた俺は、一服して、今日の疲れを癒すために早めの眠りに入つた

6話

『CALL』

朝早くから無線によって起こされる、

『CALL』

145・55 カズマ

「スネーク、一つ聞きたいんだが、ちよつといいか？」

「ああ、なんだ？」

「その、スネークは幽霊って平気か？」

「は？」

「いや、だから、幽霊って平気か？」

「何を言っているんだカズマ、幽霊なんて居るわけ無いだろう？」

「昨日、家を見に行こうって言ってただろう？」

「ああ、言ってたな」

「で、ウイズの知り合いが持っている屋敷に幽霊が出るらしいんだ」

「ほう、それで？」

「その知り合いの人がもし、徐霊してくれるなら、その屋敷をあげるっていつてくれているんだ」

「でも、徐霊するだけにしては、やけに報酬が高くないか？」

「そこなんだよ、実は、その屋敷は、過去に何回か、徐霊して貰ってるんだ、しかし、何回徐霊しても、そこに霊が住み着くらしい」

「そうか、なら今日の夜、頑張れよ、俺は宿に泊まるからな」

「え？ スネークは来てくれないのか？」

「アクアが居るだろう、それで徐霊は十分出来る筈だそれに、俺に徐霊能力はない」

「いや、それでも良いからついてきてくれよ、」

「すまない、今日は用事があるんだ、」

「あ、おい、まてよ！」

急いでカズマとの無線を逃げるようにして切り、朝食をとった

朝食をとった後は、いつも通りに

高難易度のクエストを受けに行った

どのクエストを受けようかと、掲示板を見ると、一つ気になるクエストがあった、

機動要塞デストロイヤーの偵察

「あ、そのクエストを受けられるんですでしたら、盗賊職の方と一緒にいった方が良いでしょう

よ、」

そう言うって俺にアドバイスをくれたのは、受付嬢のルナさんだった、このルナさんは、俺が新米だからか良くアドバイスをくれたりする

「この街にいる盗賊職って誰なんだ？」

「盗賊職は、非常に珍しく、私が知っている人でスネークさんとパーティーを組んでくれるような人はクリスさんと、カズマさんですね、」

「カズマ？あいつはたしか、冒険者じゃなかったか？」

「ええ、ですがカズマさんは盗賊系のスキルを覚えていますから」

「そうか、ならそのクリスっていう人に会いたいんだが、」「それなら、あそこのテーブルで酒を飲んでいる白い髪の人ですよ、」

「あれか、助かった、感謝する」

クリスが居るテーブルへ向かう

クリスに近づくと何か普通の人とは違う違和感を感じた

なんだろう？思い出せないが、違和感がアクアと同じものだった

そういうばアクアと初めて会ったときもこんな違和感を感じた気がする

そんな事を考えながらクリスに喋りかける

「お前が、盗賊職のクリスか？」

「うん、そうだよ！確か君は、」

「スネークだ、職業はアークウィザードだ」

「そうなんだ、で、何の用？」

「実はクエストを受けたいんだが、、盗賊職が必要だな、」

「そう、なんのクエストを受けるつもりなの？」

「機動要塞デストロイヤーの偵察だ」

「へ？」

「機動要塞デストロイヤーの偵察をやりたいんだ」

「君、それがどういうことかわかっている？」

「いや、そもそも機動要塞デストロイヤー自体よく知らんが、要塞を偵察するだけだろ」

「？」

「いや、あれに立ち向かうのはとても命知らずな事なんだけど、、いくら君の能力を使っ

ても、、」

「ん？何故俺の能力の事を知っているんだ？」

「う、噂だよ、只の、」

「嘘をつくな、動揺してるのがバレバレだぞ」

「見たことがあったんだよ、魔王軍幹部と戦ったりして他時に」

「ほう、で、デストロイヤーっていうのはどんな形をしているんだ？」

「蜘蛛型の超巨大ロボットで、自動で動く対空レーザー砲や、地面を焼き尽くすレーザー砲などがあるよ、」

「レーザー砲ばかりだな、」

「ついでに、エネルギー源には伝説のコロナタイトが使われていて、デストロイヤーの動きを止めると中のエネルギーが暴走して、自爆するよ、」

「自爆の範囲は？」

「アクセルの町3個分だよ」

「武装はレーザー砲だけか？」

「いや、ゴーレムがいるよ、デストロイヤーの上と中の両方に」

「それを作った国はどうなったんだ？」

「デストロイヤーの暴走で真っ先に滅んだよ、」

「デストロイヤーに、爆裂魔法を放つとどうなるんだ？」

「対魔法用の決壊があるから効かないよ、最大威力のやつを5発ぐらい撃ち込めば別だろうけど」

「ここまで聞いておいてなんだが、このクリスという人間は、デストロイヤーに対して異常に詳しい」

ギルドの人も、デストロイヤーにたいしては、蜘蛛型で、魔法が利かない位しか教えてくれなかったのだ

もしかしたらこいつはアクアのような神なのか、もしくは、俺と同じような転生者なのかもしれない、アクアに心当たりが無いか聞いてみる事にした

145. 44 アクア

「なあ、アクア一つ聞きたい事があるんだが、、」

「なに？今お酒のんで、調子良いから私の知ってることならなんでも教えてあげるわよー」

「クリスという女性を知っているか？」

「えっ？クリス？、、クリスねえ、、どっかで聞いたことある気がするわ、」

「銀髪の少女なんだが、、」

「

「あー！思い出したわ！確かその子は、この世界で最も信仰されている女神エリスの下界に降りた時の仮の姿よー」

「そうか、だが何故お前がそんなことを知っているんだ？」「昔にエリスに興味を問いたでしたら教えてくれたわ、」

「そうか、助かった、あと一つ聞きたいんだが、、そのエリスって言うのは、無線機を着

「けてないのか？」

「正確に言うとおれは無線機じゃないんだけど、とりあえず周波数はあるわよ」

「教えてくれないか？」

「えーつと確かか、143.44ね！」

「ありがとう、助かった」

「御安いご用よ！」

アクアとの無線を切りアクアの言っていた無線にかける

143.44 女神エリス

「こちらスネーク、聞こえるか？」

「はい、聞こえますよ、スネークさん、あと何故この周波数を？」

「アクアから聞いた」

「そ、そうですか、それで、何の御用ですか？」

「クリスの時のしゃべり方で良いぞ、あと、何故そこまでデストロイヤーについて知っているんだ？」

「あつ、私がクリスだつてバレてるんですね、それと、実は私の仕事の一つに転生者の管理をしています、あのデストロイヤーも、実は転生者が作ったんです」

「デストロイヤー煮弱点は？」

「無いと思いますよ、但し、あなたが魔法で兵器を作れば別ですが、」

「その情報だけでも十分だ、助かった、」

エリスとの無線を切り、クリスの方をみる

「REXなら、破壊は可能か？」

「うん、多分あれを使えば倒せると思うよ、でも、この世界に電気なんて無いけど大丈夫なの？」

「そこは俺の魔法でなんとかするが、、」

「出来るならいいけど、ちょっと冒険者カード貸してくれない？」

「ああ、良いぞ」

「えーつと、、もし、このままREXを精製しようとしたら、君はぶっ倒れて、1週間は動けなくなるね、」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「よし、スネーク、金は持っているかい？」

「ああ、1億エリス程ならあるぞ、」

「よし、それなら大丈夫だねそれなら、知り合いの魔道具店に行こうと思うんだけど、スネークってウイズって言う人知ってる？」

「ああ、あのカズマの知り合いの、」

「そう！その人からマタナイトを買うんだよ、そうすればREXを作っても大丈夫だよ！」

「わかった、じゃあ銀行に行くか、」

銀行で金を降ろした俺達は、ウイズの店に行った

「よお、ウイズ、」

「あ、スネークさん！何の御用ですか？それにクリスマスさんも！」

「実はな、マタナイトが欲しいんだ」

「へえ、マタナイトですか、でも私のところにあるマタナイトなんて、一つに100万エリスからの上質な奴しかありませんよ？」

「構わん、それより早くマタナイトというものをくれ」

「いくつ必要ですか？」

「そうだな、余裕をもって5個くれ」

「分かりました！えーっと代金が500万エリスです！」

「ほら、これで良いか？」

「ひ、ふ、み、、はい！確かに頂きました！」

「、、ところでスネークさん、いきなりマタナイトを買ったりして、どうしたんですか？」

「いや、ちよつとな、クエストに行こうと思ったんだ」

「へえ、どんなクエストですか？」

「デストロイヤーの進路予測だ」

「デ、デストロイヤーですか？」

「ああ、そうだ」

「そうなんですか、、気をつけて下さいね？デストロイヤーは魔法が利かないらしいですし、」

「わかった、じゃあな」

そういつて、ウイズの店から出た

「そういえば、カズマ君やアクアさんが居ないのは何でなの？」

「なんか、屋敷を徐霊するとかなんとかで、居ないんだ」

「へえ、そうなんだ、とりあえず、進路予測は明日にしようよ、今日はなんかもう、疲れたし、」

「そうだな、」

クリスと別れたあと、自分は何時もの宿屋に戻る、明日は激戦が予想される

その為にも、早く寝て、明日に備えようと思った

準備を万端にして、ギルドに行くと、進路予想のクエストはもうなくなっていた。

別のクエストを受けようとするカズマ達と合流する

「よお、カズマ、昨日のクエストはどうだったん『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！冒険者の皆さんは、直ちに武装し、冒険者ギルドに集まってください！』」

いきなりの警報に対して驚きながら、カズマが無事屋敷を手に入れたことを知ったカズマと喋った後に、エリスから無線が来た

143. 44 エリス

「あ、もしもしスネークさんですか？」

「ああ、そうだが？」

「ちよつと町の正門までこれませんか？」

「それは別に良いが、どうしてだ？」

「今の内にREX を作ってしましましょう」

「そして、クリスの潜伏で隠しておきましょう」

「わかった、じゃあ今から行く」

エリスとの無線を切り、正門へ向かう

「あつ、遅いよ！スネーク！早くしないとみんなが来るよ！」

「わかった、急いで取りかかる」

そして、いくつものマタナイトを使い、REX を作る、製造魔法にも大分慣れてきたからからか、完成にそこまで時間はかからなかった

「よし！後は、任せといて！デストロイヤーが来る頃にはスネークがこれに乗ってデストロイヤーを何時でも倒せるようにしとくから！」

「それは助かる、ありがとな、」

「御安いご用だよ！」

「お、そろそろ冒険者が来るぞ」

気がつくとそこにクリスはいなかった

きつと潜伏を使っているのだろう

カズマが走ってこっちに来る

「おい！スネーク！何でこんなところにいるんだよ、ちゃんと作戦があるんだからな、協力してくれよ、」

「多分その作戦は必要ないな」

「は？」

「俺が一撃で倒す」

「いや、相手はあのデストロイヤーだぞ？あれ本体に魔法を無効化する決壊があるんだぞ？」

「関係ない、それに、俺がどうやってデストロイヤーを倒すかは、潜伏を使えば解るんじゃないか？」

「え？じゃあ『潜伏』、、、なあ、スネーク冗談だろ？あの兵器を使うのか？」

「大丈夫だ、操作がしやすいように改造してある」

「そ、そうか、俺はめぐみんの所へ言ってくる」

「おう」

そうしてる間に、デストロイヤーが見えた

想定以上のデカさに驚きつつ、REX に乗り込む

そして、デストロイヤーに狙いを定め、レールガンを撃った

7 話

ゴオオオオオオオオオオ

という爆音が鳴り響く

REXのレールガンを食らったデストロイヤーの脚は折れ、表面の装甲は、めっちゃくちゃになっていった

頭の部分を直撃しており、レーザー砲や、結果はもう機能しなくなっていた

一瞬の出来事に冒険者達は唾然としていた、あのデストロイヤーを一瞬で破壊したあげく、爆発もないのに、凄いい轟音がしたうえに、REXは一瞬で姿を消したのだ

「やったわ！何よ、起動要塞デストロイヤーなんて大げさな名前しておいて、期待外れも良いところだわ。さあ、帰ってお酒でも飲みましょうか！なんとたって一国を滅ぼす原因になった賞金首よ、報酬は、いったいおいくらかしらね！」

アクアがはしやぎ始めた瞬間

『この機体は、起動を停止致しました。繰り返しますこの機体は起動を停止致しました。起動エネルギーの消費が出来なくなっています。搭乗員は、速やかにこの機体から離れて下さい。繰り返します・・・』

デストロイヤーから警告のアナウンスが聞こえてきた。

カズマやアクアが何か言い争っているが気にせずエリス、アクアに無線をかける

アクア145. 44

エリス143. 44

「おい、エリスこれどうしたら良いんだ？こんなこと聞いてないぞ？」

「もう一回レールガンで消し飛ばせば良いんじゃないですか？」

「駄目よ、そんなことしたってコロナタイトの爆発は避けられないわ」

「えっと、、じゃあコロナタイトをテレポートで移動させるとか？」

「エリスにしては良い案じゃない、スネーク、テレポート使える？」

「ああ、使えるぞ」

「そう、それなら中に乗り込んで、コロナタイトをテレポートさせると良いわ」

「そうだな、テレポート先は魔王城で良いか？」

「確かにそこで良いんだけどちよつと待って？何でそんな所に行ってるの？」

「ウイズに連れていってもらったからだ」

「ふーんまあ良いわ、なら早速作戦を開始するわよ

！

無線を切り、デストロイヤーに侵入する

他の冒険者達は、もう既にデストロイヤーの上へ登り、侵入しているようだった、俺もそのあとに続いて上へ登る

「お、スネーク、やっと来たか」

アクアや、ウイズと一緒にゴーレムを倒そうとしているカズマに声をかけられる

「ああ、それで、今どういう状況なんだ？」

「ついさつき、デストロイヤーの中に入る扉がぶち破られて、俺達も今から突撃するところだった。」

「そうか、なら俺も行こう」

「おお、そうしてくれると助かる」

「よし、じゃあ行くぞ」

カズマとしゃべっている間に、デストロイヤーの中にいたゴーレムはあらかた片付けられているようだった

奥に進むと、一つの部屋があった

そこには、一人の遺骨と、古い手帳があった

「スネーク、ここはカズマたちに任せて、先にコロナタイトを探しましょう、ウイズ、行

くわよー!」

「そうだな、」

「まずはこっちの方を見るわよ!」

カズマ達から離れて数分が経った

「おい、アクア、これって・・・」

そう、俺たちの目の前には赤々と燃える伝説のレア鉱石、

コロナタイトがあった。いつ爆発するか分からない爆弾に身を晒して居るような気分になり、少しびびってしまう、

「大丈夫よ!多分、」

「まあ良い、取り敢えず俺とウイズの上級魔法で鉄格子を破壊したら、ウイズはコロナタイトに向かって氷の上位魔法を、アクアは俺に向かって回復魔法を頼むそして、頃合いをみて、俺がテレポートをする!」

「わかったわ!」

「任せて下さい!」

「よし、行くぞ!」

「『ライト・オブ・セイバー!』」

二人の攻撃魔法が、鉄格子を貫く

「『カーズド・クリスタルプリズン』！」

そして、ウイズの氷魔法で急に冷えたコロナタイトを取り出す

「スネーク！今よ！『ヒール』！『ヒール』！『ヒール』！『ヒール』！」

アクアによって手の回復をされ、魔法が使える状態まで回復したのを確認すると、

「よし、『テレポート』！」

——魔王城前——

「あちちちっ」

あまりの熱さにうっかり手を離してしまう

赤を通り越して、白く輝いているコロナタイトを魔王城前において、テレポートを使

う

しかし、テレポートの発動を遅れてしまい、右手が爆発に巻き込まれてしまった

「『テレポート』」

テレポートした瞬間、アクアの回復魔法をかけてもらう

一発じゃ元通りにはならないとはいえ、止血位はできた、

「あ、いた！『ヒール』スネーク、大丈夫だった？」

「ああ、なんとかな」

「そう、ならよかった！あと、もう一仕事頼めるかしら？」

「ああ、なんだ？」

「デストロイヤーをミサイルで吹き飛ばしてほしいの」

「今の体でRPGを撃つのは勘弁してもらいたいな」

右手を失っているのに、そこからさらに戦えと言うのは流石に無理がある

「REXに搭載されてる奴を使えば良いじゃない」

「ならお前がやってくれないか？あれは改造してあつて、乗り込んで、頭に上手くREXを接続出来れば、思った通りに操れるようになってる」

「そ、そうなの？頭の中で、ミサイルを撃ちたいって思えば撃てる？」

「ああ、そうだ、」

「それは凄いわね！」

「あと、知力が高くないとREXに接続出来ないが、、大丈夫か？」

「大丈夫よ！私はこれでも女神よ！そんな機械位ならこつちの方から調節してやるわよ」

「あと、姿を隠したいと思えば、ステルス迷彩と潜伏が同時に発動する」

「わかったわー！」

そういつて REX に向かっていくアクア

そう言えば、レールガンを撃ったあと、REXは無線機をつけてるもの以外存在すら分らないようにしておいた筈だ、他の冒険者になんて説明しようか、

「あ、おーい、スネークー！」

カズマが大声で俺のことを呼んでくる、それと共にめぐみんが以上にハイテンションで、喋りかけてくる

「スネーク！スネーク！あれは一体何ですか!?!あのかっこいい巨体ロボット、そして、あのデストロイヤーを一撃で破壊する、あの変わった形の大砲！素晴らしく格好いいです！あれは紅魔族の琴線に触れましたよ！」

「まあ、それは後で説明してやる、それより、今すぐデストロイヤーからみんなを離れさせる」

「何故だ？」

「アクアが REX に向かった。アクアが上手く REX を操ることが出来たら、ものの数分でデストロイヤーは、ミサイルの雨の餌食になる」

「ちよつと待て、どういうことだ？アクアが REX に向かった？何故知力最低レベルのアクアを REX に向かわせたんだ？あと、怪我大丈夫なのか？片腕が吹き飛んでいるが、」

「大丈夫だ、」

「本当か？」

「ああ」

疑惑の目をこちらに向けながら、カズマは叫んだ

「おい！、みんなー！今すぐデストロイヤーから離れろー!!」

そう言うのと、周りの冒険者がデストロイヤーから離れていく

145. 44 アクア

「そろそろ良いぞ、」

「わかったわ！アクア、行きまーす！」

アクアとの無線を切るといきなりREXが姿を表した

『カズマー！人は居ないでしょうね!』

「大丈夫だぞー！」

アクア（REX）が姿を表すと共に、冒険者が動揺し始めた

「おい、なんだあれ、」

「またスネークさんがなんかつくったのか？」

爆裂魔法が放たれると、デストロイヤー周辺もろとも吹き飛んでいた

「おお、」

「ひとまずこれで緊急クエスト終了だな！」

「そうだな、取り敢えず早く腕を治して貰いたいところだ」「取り敢えずギルドへ戻ろうぜ、そこでアクア達とも合流しよう」

めぐみんが完全に破壊すると、周辺の冒険者は、安心して、冒険者ギルドに帰つていった

「では、デストロイヤー破壊を記念して、『乾杯！』」

「『乾杯！』」

パーティーで、デストロイヤー破壊記念の乾杯をしたあとは、皆、ギルドで飲んでいった、アクアが宴会芸をしたり、

めぐみんにREXについて質問攻めにされたり、と色々あった

ギルドでは、デストロイヤーの報酬金が入るので、冒険者がここぞとばかりに、酒を浴びるようにして飲んでいった

「ところでアクア、REXはどこにおいてきたんだ？」

「今私達が住んでる屋敷の庭に置いてきたわ、」

「そうか、」

それからは、カズマ達に案内されて屋敷に着いた
立地条件こそ良くないものの中々キレイで良かった
ちなみに腕は冒険者ギルドでアクアに治して貰った